RENAISSANCE
学校法人 東北文化学園大学 広報誌 Vol.20

撮影：中嶌英雄

スーパーアイドル AKB48 のステージ。２日間で約１万２千人の観客が詰めかけた学園祭はこれまでにない盛況となった。

東北を元気に！人気アーティストが集結 ロックの学園と文化学園祭

撮影：岡利恵子

秋晴れに恵まれた10月20・21日。東北を応援しようとロック音楽のアーティストが学園に集まった。体育館ライブとロックをテーマにした授業を展開する、その名も「ロックの学園」（主催・NHKエンタープライズ、仙台市）。本学園の大学・専門学校の学園祭と併催となったため国民的アイドルグループのAKB48、平原綾香、サカナクションらが出演した。２日間で約1万2千人の観客が詰めかけた学園祭はこれまでにない盛況となった。

ロックの学園は昨年、震災のため開催を見送っていたが、今年は是非とも東北で開催し、復興の応援したいというアーティストたちの思いを受け、私たちの学園も賛同し2年ぶりの開催となった。学生たちは大勢の来客を予想し準備を整えた。より念入りに多めの食材を用意し、学生催しの野外ステージでは夜遅くまでリハーサルを重ねた。専門学校ではこれまでの学生ボランティア活動の成果を披露しながら、ロックの学園に応え「がんばろう東北」を呼び掛けていた。

撮影：中嶌英雄

撮影：中嶌英雄

同時開催

撮影：中嶌英雄

撮影：岡利恵子

篠﨑靖男氏と仙台フィルハーモニー管弦楽団とともに、第４楽章を唱う合唱団

学校法人東北文化学園大学　震災復興支援事業

被災地の学生が唱う 秋の第九コンサート

11月11日、本学園は「被災地の学生が唱う秋の第九コンサート」を東北大学百周年記念会館「川内萩ホール」で開催しました。秋も深まり冷雨が降る中、805名のお客様で会場は埋めつくされました。本学園学生たちは精一杯の第九を歌い上げました。

このコンサートは、昨年12月、岩手県大船渡市リアスホールでの「大船渡第九コンサート」に引き続き開催されました。新たに仙台フィルハーモニー管弦楽団を迎え、イギリスを拠点に世界的に活動するマエストロの篠﨑靖男氏がタクトを振り、ソリストには名実揃ったアーティストが名を連ね、東北大学と岩手大学教育学部音楽科ＯＢが合唱団に加わりました。

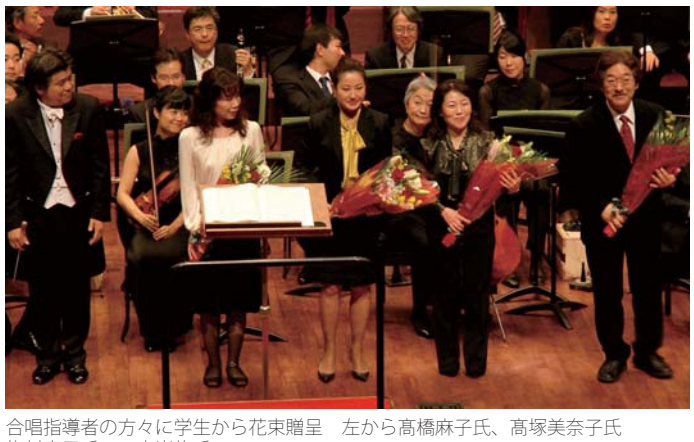
本番に先立ち学生たちの練習は、これまで以上の熱の入れようで、授業が終わった後、夜遅くまで練習を重ね、五十嵐修氏、梅村憲子氏をはじめとする指導者から熱い檄が飛んでいました。その甲斐あって当日の出来栄えは上々。ステージを降りた学生たちはやり遂げた達成感で満ち足りた表情をしていました。合唱団に参加した、看護学科1年の桑島貴嗣さんは「全員の気持ちが一つになる瞬間に感動します。「合唱は綱引きと同じ」という言葉で、皆で力を合わせて目標に向かう素晴らしさを先生に教えていただきました。これは医療でも大事なことだと思います。良い経験になりました。」と話してくれました。

大きなステージは２回目となる学生たち

看護学科の学生は白衣でステージに上がりました

ソリストの方々に学生から花束を贈呈　左から黒田博氏、竹田昌弘氏、永井和子氏、菅 英三子氏

コンサートの後に開催された打ち上げ会場での一コマ



合唱指導者の方々に学生から花束贈呈　左から髙橋麻子氏、髙塚美奈子氏
梅村憲子氏、五十嵐修氏

高校生デザインコンテスト2

このコンテストは、プロの視点に触れることで、社会性と職業観を身につけてゆく学びの場。北は青森二戸市、南は静岡市から7校、111点の作品が集まり、審査は大混戦。

今年で2回目となる、専門学校インテリア科、建築科主催の「高校生デザインコンテスト」は、高校生を対象とした「まち」と「椅子」をテーマにしたアイデアコンテスト。高校生が考えたアイデアをインテリアと建築のプロが審査し講評します。今回、作品を審査するのは大蔵建築設計事務所代表取締役の大友彰氏とFROMALEX代表三塚春枝氏、そして本校で建築・インテリア・エクステリアを教える教師陣。高校生たちは審査員の講評を通して社会性を学び、職業観を身につけてゆく。そんな学びの場として、このコンテストを授業の一環として取り入れる高校が増えてきています。

12月1日、いよいよ公開プレゼンテーションによる二次審査の日。14名の高校生たちが、プレゼンテーションに挑むため、専門学校キャンパスに集まりました。

賞状を手に記念撮影

今回、椅子の部門に参加した、宮城県聴覚支援学校の関涼太郎さんと舘澤紘一さんは、審査の後に実制作した椅子を披露。デザインの意図や制作過程の苦労話などを説明し、作品のクオリティの高さに参加者から賞賛を受けていました。宮城県工業高校のある生徒さんは今回のコンテストに参加して「先生方の講評や他の人の作品意図を聞いて、自分のデザインを客観的に見ることができました。デザインすることは、その使う人のことをまず考えなければいけないということを学びました」と話してくれました。

作品は2月18日から開催する本校卒業制作展に展示されます。デザインコンテストは来年も開催する予定です。多くの方の参加をお待ちしております。【問合せ】東北文化学園専門学校高校生デザインコンテスト係電話022-233-8163まで。

実制作の椅子を披露し作品の意図を説明する関さん

審査結果は次のとおり。

まちのアイデア部門
第一位・大橋千夏さん静岡県立科学技術高2年／第二位・中嶋瞳美さん宮城県工業高3年／第三位・中嶋美樹さん宮城県工業高3年／清水留美香さん静岡県立科学技術高1年／特別賞・石井佑季さん宮城県工業高3年／大島絵梨子さん宮城県工業高3年／広瀬　舞さん宮城県工業高3年

椅子のデザイン部門
第一位・関涼太郎さん舘澤紘一さん宮城県聴覚支援学校3年／第二位・船山祐佳さん宮城県工業高2年／第三位・伊藤理佐さん秋田県立大曲工業高2年／野里博信さん岩手県立一戸高3年／特別賞・高村和佳奈さん岩手県立一戸高3年／大羽賀静さん宮城県工業高2年／池田葉月さん静岡県立科学技術高2年

高校生スピーチコンテスト

今回で8回目を数える本学園主催の高校生スピーチコンテスト。10月27日に本学で開催され、最優秀賞に輝いたのは柴田農林高2年川島加那さん。中国人の優しさに触れ、希望を感じたという感動的な弁論でした。

高校生スピーチコンテストは本学園の震災復興支援事業として文化芸術分野の分化会が実施しています。

震災から1年半が過ぎても、復興いまだ半ば。今年のテーマも昨年に引き続き「私たちにできること」。若者らしいはつらつとしたメッセージを発信しようと、7名の高校生が集まりました。

開会に先立ち、土屋学長が「一人ひとりがいつも心がけるべき重要なテーマ。これから復興を担っていく君たちの思いのたけを発表してください。」と激励。7人は具体的な体験談を添えながら、震災から学んだことを熱を込めて語りました。

最優秀賞に選ばれた、柴田農林高2年の川島加那さんは「訪中した際、日本人のことを気遣う多くの人たちに出会い、見知らぬ人にでも心配してくれる優しさに感激しました。私たちもきっと持っているその力こそ、東北の復興を推し進める力だと思いました。そのパワーを集めればみんなが笑顔になれる活動ができるはず。それが私たちにできること」と話してくれました。

表彰式の後、土屋学長・審査員の先生方との記念撮影

入賞した3名　左から審査員特別賞　初森一生さん、最優秀賞の川島加那さん、優秀賞の佐々木美優さん

教育支援センター

教育支援センターは、今年5月に開設した、学生を対象とした修学サポート機関。誰でも「いまさら聞けない」という勉強の悩みはあるもの。専門・応用科目の学習に備え、文理に共通の基礎的学力を養い、自発的な学習習慣を身に付けるための対策として、大学に求められるニーズの高い取り組み。

教育支援センタースタッフ。センターを気軽に利用してください。

教育支援センターは、学生を対象にした修学をサポートするための大学機関です。誰でも「いまさら聞けない」という勉強に関する悩みの一つや二つはあるものです。センターではそんな悩みを解決するための「学習相談」や「個別指導」を行っています。また、普段は自習スペースとしても解放し、グループ学習のための個室も完備しています。

個別指導は、特に国語と数学に専門講師を配置して指導を行っています。大学での授業は学年が上がるほど、専門性や応用力が求められます。そのためには基礎学力を養い、学生が自発的な学習習慣を身に付けることが必要になります。そんな学生達のやる気をサポートするのが教育支援センターです。「授業の内容が理解できない」「学習の仕方がわからない」「就職できるか心配」など、様々な悩みについても、専任の担当講師が相談に乗り、就職センターや学生相談室など、他の機関と連携し親身になって解決に導きます。

教育支援センターへの相談は随時窓口で受け付けますが、メールでも予約ができます。開館時間は朝9時から夜7時まで。個別指導は午後3時から夜7時まで。月から金まで毎日開館しています。申し込み受け付けはkyouikus@office.tbgu.ac.jp　まで。

震災ニモマケズ― 見よ！東北の底力
復興支援フォーラム開催

「震災ニモマケズ―見よ！東北の底力」をテーマに、東北文化学園復興支援フォーラムが9月23日、仙台市青葉区の江陽グランドホテルで開かれた。作家の高橋克彦氏が「和の心」と題して講演した後、歌手のさとう宗幸氏が、被災地支援の歌と語りで会場を盛り上げた。休憩後のパネルディスカッションでは同校教授を司会に4氏が被災地復興への課題について意見を交換。情報発信や広域連携の重要性などを訴えた。来場した約500人の学生や市民は復興へのメッセージを受け止め、それぞれの立場で明日に進むべき道を探った。

基調講演「和の心」
直木賞作家　高橋 克彦 氏
東北人の精神 復興に不可欠

「和の心は東北人の大事な宝」と語る高橋 克彦 氏

東北人のルーツは出雲であり、その人たちは「和の民」であった。私たちは自分は日本人だと言っているが、根底には「自分たちのルーツは和の民だ」という意識を持ち続けてきたと思う。それは、和食、和室、和裁など、昔から日本にある伝統的なものに対し「和」という言葉を使っていることで証明される。和とは何か。辞書で和の付く言葉を追いかけてみるとよく分かる。平和、温和、柔和…。食べ物を和（あ）えるといった使い方もある。

縄文時代のストーンサークル（環状列石）は古代人のお墓と言われているが、実際は古代人たちの一種の守りとして作られた。その環（わ）が、和の民の原点と考えられる。

手を握り合った人々が環を作ったとき、それぞれの思いが一つになって中心に向かって行き、そこで新たな思いが立体化され、空に放たれる。互いに手をつなぎ、人のことを思いやる。そこには始まりも終わりもなければ上下もない、それが和の心の基本である。

これは、特に東北人の心の奥底にしまわれた、大事な宝であるということを認識していただきたい。

◇◆◇

私は20年ぐらい前から蝦夷について調べ、小説を書いてきた。今の東北の人、特に若い人たちの中に気概や強さのようなものを全く感じられなくなり、なげかわしく思ったことが、書く原動力となった。

しかし、東日本大震災後の避難所で、両親を亡くした子どもが「僕よりもつらい人のために頑張る」と言ったり、90歳ぐらいのおばあさんが薄い毛布にくるまりながら「みんなが良くしてくれるので、自分も何かしなければいけない」と言ったりして、世界の人を泣かせた。失われたと思っていた和の心は残っていた。その宝はこれまで大事に至らなかったから輝いていなかっただけで、東北人一人一人の中に埋め込まれていたのだと、気付かされた。

物書きの仕事は孤独だ。僕は震災以降1年ぐらい、ほとんど小説を書けなかった。苦しんでいる人たちがたくさんいる中で、自分一人だけが関係のない小説を書くのは申し訳ない気がした。震災と向き合った小説を書くには、盛岡在住の僕は真実を知らないという不安もあった。どちらも書けないまま、被災した人たちの言葉を耳にしたりしているうち、「自分は一人ではないんだ」という思いを、この年になって初めて実感した。これから先、東北人の和の心が必要とされる時代になっていくと思う。

基調講演聞き手：医療福祉学部
保健福祉学科 教授　加藤 由美 氏

トークショー
震災復興へのメッセージ
さとう 宗幸 氏

さとう宗幸さんのトークショーは、北原謙二さんが歌ってヒットした「ふるさとの話をしよう」で始まった。全国各地で開かれる被災地支援コンサートに招かれたとき、次のようなメッセージを添えて、必ず1曲目に歌うことにしているという。

「僕たちの古里は姿を変えてしまいました。古里の話をしたくとも、今お話するものは何もありません。どうぞ皆さん、自分の古里を慈しみ、古里の話をいっぱいしてください」

続いて「水仙華」をしみじみ歌いあげた。天皇、皇后両陛下が宮城野区の避難所を訪問された際、被災した主婦が津波で流された自宅跡に咲いたスイセンを皇后陛下に贈った様子は、ニュースとして報道された。その後、羽田空港で飛行機から降りる皇后陛下がテレビに映し出されたが、その手には、主婦が贈ったスイセンが握られていた。その姿に感動して書かれた詩に、さとうさんが曲をつけたのが「水仙華」だった。

おなじみの「青葉城恋唄」の熱唱に続き、友人から聞いた震災直後の福島でのエピソードを語った。一つの弁当を前に言い争いをしている初老の二人を見た自衛隊員が、自分のおにぎりを差し出して喧嘩をしないよう声を掛けたという。しかし真相は違っていた。「俺は腹いっぱいだから、おまえ持っていけ。俺はいいからおまえこそ…」。事実を知った自衛官は「東北にある慈愛の精神が、必ず東北を復興させる」と福島の友人に告げたそうだ。

被災地を支援する歌「虹を架けよう」では、「僕らを育てた多賀城に、東松島に…、宮城県に虹を架けよう、僕らが大好きな東北に虹を架けよう」と高らかに歌い、会場の手拍子を誘った。そして、さとうさんが作詞作曲した東北文化学園の学園歌「輝ける者」で、トークショーの幕を閉じた。

「東北の慈愛の精神こそ東北復興の力」と話す さとう宗幸 氏

【コーディネーター】
総合政策学部長　地域連携センター長
三木 賢治 氏

河北新報社
論説委員会副委員長　原谷　守 氏

アイリスオーヤマ株式会社
社長室マネジャー　大友 清之 氏

医療福祉学部
看護学科 准教授　北山 玲子 氏

総合政策学部
准教授　坂本 直樹 氏

パネルディスカッション
復興への三つの課題

三木　復興を加速化させていくためのアイディアや克服すべき課題について伺いたいと思います。東北文化学園大学では多くの学生、教職員がボランティアに取り組んでいますが、北山さんは最近、石巻の仮設住宅で意識調査を実施したそうですね。

北山　8月中旬から9月上旬にかけて、石巻市の訪問支援相談員113人にアンケートにご協力いただく形で、仮設住宅の現況を調査しました。その結果浮かび上がったのが家族の崩壊や独り暮らし世帯の増加です。通院や入院生活を余儀なくされる人も増えています。新たな生活基盤を作ろうにも見通しが立てられないという、悲痛な声もありました。また、コミュニティー内の絆を作り上げる困難さも伝わってきました。

三木　原谷さんが今回の震災で最も強く感じられたのはどんなことですか。

原谷　哲学者の梅原猛さんは、「原発の事故は天災であり、人災であり、文明災でもある」と言っています。効率を重んじてきた西洋文明や、科学技術で自然を克服できるという近代思想が、しっぺ返しを受けたということです。科学万能の右肩上がりの思想から、自然と共存の思想に変えていく。その先頭に立って行けるのは東北人です。

■ □ ■

三木　経済活動への影響はどうでしたか。

坂本　東北地方の資本ストックがダメージを受けたことで、隣接する関東圏や東海エリアの産業にも大きな影響が見られました。皮肉なことに震災により、東北地方が日本経済にも世界経済にも大きな貢献を果たしてきたことが明らかになりました。

三木　大友さんは民間企業の立場で復旧状況をどのようにとらえていますか。

大友　復旧して昔に戻せば問題が解決するかというと、そうはいきません。合理化が進めば雇用の面ではなかなか厳しい。創造的な復興という形で進めなければ、東北の将来はないと考えます。

坂本　ハイブリット車の生産を大衡村の工場で増産するような話もあります。21世紀型産業が東北地方に集積すれば企業の集積を促し、雇用を生み出すという好循環をもたらす可能性もあります。

大友　九州や関西などでは震災の記憶が薄れてきて、経済界の一部からは「国の予算が東北にばかり配分される」と不満を抱いています。私たちはもっと被災地の状況を発信していかなければいけません。

三木　風評被害という問題もありますね。

坂本　宿泊旅行統計調査によると、今年の4月から6月の間に東北地方を訪れて宿泊した外国人の数は、震災前の2010年と比べ55・9％も減りました。今なお風評被害が問題になっているのは、これからの東北の経済を考えるうえで大変なことです。

原谷　放射能に対し、日本人は特に敏感です。原発事故の政府の初期対応がまずかったと思います。データが隠されたことにより、一般の人は専門家の言うことも、政府がやっていることも信頼できなくなっている。不信が今回の風評被害の背景にあると思っています。

三木　政府の対応がごてごてに回っているような気がしていますが…。

原谷　中央政権は被災現場から遠く、スピード感がない。道州制が敷かれていたらよかったと強く思います。千年に一度の災害なら、千年に一度の大改革をやればいい。従来の発想にとらわれずに進むことができるかどうか、日本は問われています。

■ □ ■

三木　復興への三つの課題と、タイトルに掲げましたので、皆さんにそれぞれ挙げていただきたいと思います。

原谷　一つは復興の加速です。そのためには、自治体の職員の人材確保が課題になります。もう一つは働く場所の問題です。特区や優遇税制などを活用し、雇用をつくっていくことです。三つ目は防災対策で、復興とともに進めていかなければなりません。

大友　当社社長の大山が代表幹事を務める仙台経済同友会や、在仙の経済団体からはいろいろな提言をしています。一つは思い切った政策、思い切った対応が必要だということです。例えば、津波の被害があった仙台空港から仙台港にかけての一帯を国際物流の特区にしたり、需要が高まる介護の分野を見据え、最先端の国際介護や看護の専門の大学や施設を持ってくることも考えられます。また、民間企業が行政サイドとタックを組み、人材支援など思い切ったバックアップ体制を進めることも必要です。そして3点目として、若い人の人材育成を挙げたいと思います。経済界として、東北を引っ張っていこうという志を持つ若者の、背中を押すような活動をしていきたいと考えています。

坂本　まずリスクへの対応を制度的に確立し、東北地方が経済活動を行う場として安全であることを理解してもらうことが大事です。水産資源を生かした水産業の復興も考えなければなりません。観光面では県境を越えた広域連係や、被災地の状況を語り継ぐための被災地ツーリズムのようなやり方が考えられます。

北山　ボランティア活動をしながら感じているのは防災意識の温度差です。被害の少なかった内陸部では防災意識が薄れてきています。復旧・復興支援と並行し、次の災害に備えた防災支援に取り組んでいかなければなりません。今私たちは学生と一緒に、被災経験を生かした生活用品のアイディアなどを冊子にまとめています。完成したら皆さまの近くに伺い、防災について共に考える機会をつくりたいと思っています。

三木　問題点は浮き彫りになってきたような気がしますが、道なお険しというのが現状です。私たちがまずできることとして、大震災や被災した方々のつらさや悲しみを忘れずに、次世代へ教訓として引き継いでいくことから心掛けて行きたいと思います。

河北新報　平成二十四年十月二十一日掲載の
採録記事を転載

大学主催の障害者スポーツ大会

本学主催の知的障害者のレクリエーション・スポーツ大会「パロリンピック」が、10月6日に本学の体育館で開催されました。参加したのは9施設、約140人の施設利用者さん。学生・教職員合わせて160名余りがサポートする中、熱戦を繰り広げました。

この大会は今年で8回目。普段から運動する機会が少ない知的障害者の皆さんに、大学キャンパスで学生と一緒に身体を動かして楽しんでもらう催しです。

この日は、ボウリングをアレンジしたゴーリングや玉入れなどユーモラスでアイデアいっぱいの競技に挑戦し、館内は歓声と笑い声に包まれました。

大会終了後、東北地方の復興を祈念してバルーンリリースを行い、想いを綴ったメッセージカードを添えた色鮮やかな300個の風船が、秋風に乗って空高く飛び立っていきました。

本大会実行委員長でもある植木章三教授はこの取り組みについて次のように話してくれました。「多くの施設から大会を楽しみにしていると聞き、嬉しく思っています。この取り組みは、学生たちにとっても、貴重な学習の場です。障害者と接する機会を得ることで、障害に関する理解をより深める心のバリアフリーを育みます。また、運営を通して学生間の絆が生まれ、今年から他学部も参加していますので、学部を超えた繋がりにも期待しています。」

競技前の準備運動

競技終了後、メッセージを添えた色鮮やかな風船が空に舞い上がった

みんな真剣勝負　うまくいったら大歓声！

みんな笑顔！　皆さん参加しておもいっきり楽しんでくれました

市民学習講座

本学では、地域の皆さまの学習活動にお役立ていただくため、豊富な教授陣による、多彩な出張講座を用意しています。講師料は無料。ご要望に応じて担当の講師を派遣いたします。プログラムは全37講座。医療福祉系では、加齢に伴う心身機能低下への対応、高齢期の生きがいづくり・健康増進、ストレス社会に立ち向かうための対処法、認知症の方への生活支援のあり方、中・高齢者と目の病気など、からだと健康を守るためのテーマが掲げられています。また、人文・科学技術系では、リフォームと健康住宅、コラムやエッセイをまとめる錬文術など、生活の知恵や人生を豊かにする教養や生活科学など、楽しく役立つ講座を多く揃えています。お申込みは学習活動の場所が仙台市内で、平日、参加人数が概ね10人以上で承ります。講師料はいただきませんが、交通費程度のご負担をお願いしております。詳しくは東北文化学園大学地域連携センター、電話022-233-3451またはメール liaison@office.tbgu.ac.jp までお問い合わせください。

震災復興基金「輝ける者」

学校法人東北文化学園大学が設置する東北文化学園大学、東北文化学園専門学校、久慈幼稚園及び友愛幼稚園は、被災地に存する教育機関として、大震災からの復興を担う人材の育成に努めて参ります。そこで、震災の影響等により家計が困窮した学生及び園児に対して、支援を行うために震災復興基金「輝ける者」を設立し、皆様からのご支援をお願いしております。【基金の使途】東日本大震災で被災した学生及び園児の修学・就園支援のため東日本大震災で被災した施設設備や教育・研究環境の復旧工事等のため。【基金の概要】金額：任意【募集期間】平成25年3月31日まで。詳細についてはホームページをご確認ください。

サッカー国体
宮城県選抜選手に

総合政策学科４年
吉田拓郎さん

スポーツを通した交流が地域振興につながると思います。その力を信じています。

スポーツを通していろいろと学んだと話してくれた吉岡さん

大会が行われた秋田県にかほ市サッカー競技場

8月10日～12日秋田県の仁賀保グリーンフィールドで開催された、国民体育大会東北ブロック大会に、総合政策学科4年吉岡拓郎さんがサッカー宮城県選抜選手に選ばれ出場しました。「ぎふ清流国体」の予選となることの試合、惜しくも予選敗退でしたが、10日の対山形県選抜戦は7対0の圧勝。吉岡さんも後半30分頃からピッチに立ち、華麗なアシストと自らのシュートも見せてくれました。

小学4年生からサッカーを始めた吉岡さん。サッカーを通して様々な人との出会いがあり、多くを学んだそうです。

現在、総合政策学科で学んでいる地域振興策とスポーツとの関係について「スポーツを通した交流が地域振興につながる。もっとスポーツ文化を広げたい。その力を信じています。」と話してくれました。また、これから進学や将来の進路を決めようとしている高校生たちに向けた一言をお願いすると「最後までやりとおすことが大きな自信につながる。努力を惜しまないでほしい。」と力強くも真摯でひたむきな人柄が伺えるメッセージをいただきました。

看護学科戴帽式
医療従事者としての使命を心に刻み

式典でそれぞれが医療従事者としての使命を心に刻みました

7月14日、看護学科は戴帽式を執り行いました。式典はキャンドルの灯りに照らされた会場で静寂のうちに進み、式の最後には、学生たちが自分たちの言葉で綴った「誓いの言葉」を表明しました。

誓いの言葉

いま　この手の中に灯をともし
希望と決意を胸に
わたくしたち看護学生一同は
看護の道を歩み始めます
医療従事者の一員として　正しい知識と確かな技術を身につけ
生命に携わるということを深く自覚し
自らの行動に責任を持ち
看護師としての使命を全うすることを
わたくしたちは　常に現状に満足せず
その場に留まることなく
さらなる高みを目指すことを誓います
わたくしたちは　２０１１年３月11日の東日本大震災の体験を通して
より生命の大切さと尊さを
心に刻みました
その思いを　看護の場で生かし
病に苦しむ人々に手を差しのべ
１人ひとりの生命に寄り添った
看護ができるよう努めてまいります

専門学校生、英国インテリアベンダー・地元企業と被災地支援活動に参加。
英国で活躍する日本人インテリアデザイナーがコーディネート。

専門学校インテリア科・建築科は、仮設住宅の生活に少しでも潤いを提供しようと、英国からスタートした「壁紙プロジェクト」というボランティア活動に参加しています。

このプロジェクトを牽引するのは、英国を拠点とし、世界マーケットで活躍する日本人インテリアデザイナーの澤山乃莉子さん。英国と日本のインテリアメーカーに働きかけ、このプロジェクトを始動させた澤山さんは、11月9日に本校でセミナーを開催。プロジェクトの説明と参加の呼びかけを行い、翌10日に、専門学校生の他、姉妹大学人間環境デザイン学科の学生、ボランティアに参加している壁紙メーカーの職員の方々、そして卒業生らが、津波で大きな被害を受けた七ヶ浜町の七ヶ浜中学校第2グラウンド仮設住宅に集まりました。この日は英国から贈られたさまざまな壁紙を、部屋に合わせてコーディネートし、施工する作業を行いました。

この日、集会所を訪れた相澤猛さん（63歳）は「震災で仕事も失い、気がつくと出不精になっています。僕みたいな人は沢山いるんです。仮設に入れたのはありがたいが、４畳半一間の生活は時折息苦しくなる。ここにある奇麗な壁紙を張ってもらえたら気分も良くなりそうです。」と用意されたたくさんの壁紙を一つひとつ手に取り、楽しそうに語ってくれました。

澤山さんは、「この壁紙たちが、ここに住む皆さんの気持ちを少しでも和らげてくれると確信しています」と話してくれました。

専門学校で開催した
セミナーで講話する澤山さん

ボランティアを行った七ヶ浜中学校第２グラウンド仮設住宅集会所

仮設住宅集会所で壁紙の施工作業の様子

東北建築学生賞
優秀賞受賞

人間環境デザイン学科３年
瀬野尾真理子さん

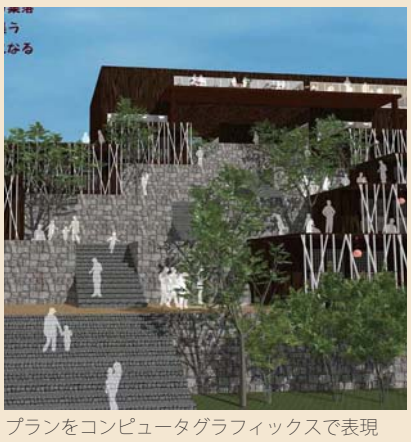
人々の絆を
つなぎ直す手助けができる
建築を考えたい

10月19日、日本建築家協会（JIA）東北支部が主催する「第16回JIA東北建築学生賞」の公開審査がせんだいメディアテークで行われ、人間環境デザイン学科3年瀬野尾真里子さんの作品『田ノ浦番屋　～コミュニティ・文化・生業の再生拠点』が「優秀賞」を受賞しました。

震災復興をテーマに、被災を受けた田ノ浦の漁師町としての文化が消滅してしまうことに危惧し、高台に移転した住居と漁港を結びつけ、町の活性化を図る施設を提案しました。

瀬野尾さんは子供の頃からものづくりやデザインを考えることが好きで、宮城県工業高校から本学に進学し、将来は建築設計の仕事に就くことを目標に頑張っています。「大学では、建物が人と環境に及ぼす影響を考える大切さを学びました。また、3・11を契機に、建築を目指す一人として何ができるのかを改めて考えるようになりました。震災でたくさんの住まいが失われ、結果、その町が培ってきた人のつながりまで失うことは悲しいことです。人々の絆は、目には見えにくいものだから、それをつなぎ直す手助けできる建築を設計したいと考えました」と作品へ込めた思いを話してくれました。

表彰式での瀬野尾さん


プランをコンピュータグラフィックスで表現

東日本大震災に伴う平成２５年度入学生に対する特別措置制度について

被　災　区　分	入学検定料	入学金	授業料
①　東日本大震災により主たる家計支持者が死亡又は行方不明の者	全額免除	半額免除	後期授業料全額免除
②　東日本大震災により主たる家計支持者が所有する住居（持家）が全壊した者			
③　東日本大震災により主たる家計支持者が賃借する住居（借家）が津波により流失（全壊）した者			
④　東日本大震災により主たる家計支持者が所有する住居（持家）が大規模半壊又は半壊した者	全額免除	半額免除	後期授業料半額免除
⑤　東日本大震災により主たる家計支持者が賃借する住居（借家）が津波により床上浸水（大規模半壊又は半壊）した者			
⑥　東日本大震災時、福島原子力発電所の事故に伴い政府指定の区域「警戒区域」「計画的避難区域」に主たる家計支持者の住居（持家又は借家）があり、居住していた者			

学校法人東北文化学園大学では、東日本大震災により被災した東北文化学園大学及び東北文化学園専門学校の入学希望者に対して、経済的負担を軽減し、学生の修学の機会を確保するため、次のとおり特別措置制度（入学検定料、入学金及び授業料の免除）の修学支援を実施することといたしました。また、東日本大震災により住居等の被害がなくても、家計支持者の失業等により授業料等の納付が極めて困難な学生に対して、授業料減免制度の修学支援も併せて実施することといたしました。詳しくはHPをご覧ください。

授業料減免制度について【平成 25 年度】

授業料減免制度は、学業優秀で、特別な事情（天災、失業など）により、授業料等の納付が困難な学生に対して、修学を援助することを目的として、平成２５年度に限り授業料を減免するものです。詳細はホームページでご確認ください。なお、上記特別措置制度や奨学金制度等との重複申請も可能です。

（1）応募資格

①　平成２５年５月１日現在、東北文化学園大学又は東北文化学園専門学校の学生として在籍する者

②　学業優秀であり、特別な事情により経済的に修学が困難な者（家計支持者が死亡、生業不振・失業した世帯、天災・その他の災害を受けた世帯　など）※『家計支持者』とは、本人の父母又はこれに代わって家計を支えている者です。

（2）減免内容

本法人が定める範囲内で平成２５年度に限り次の授業料を免除する。但し、年間の授業料を超えないものとする。

（3）審査方法

本制度は、学生個々人の人物・学力・家計・諸事情等について審査し、本法人が定める範囲内で採用者及び授業料減免額を決定いたします。審査は、家計基準を算出し、採用候補者を順位づけして審査いたします。

家計基準の算出方法は、家計を同一とする者及び家計支持者と同居する者の総所得（収入証明書で確認）から特別控除額を差し引いた認定所得金額から収入基準額を差し引いた額といたします。

※　詳細はまだ決定しておりませんが、概ね平成 24 年度の授業料減免制度を利用する予定です。

これからの震災復興支援事業３大イベント

2013年3月11日

3.11 追悼コンサート

復興支援フォーラム 2013年9月8日　　第九コンサート 2013年12月10日

【進学センター】 0120-556-923

TEL：022-233-8173　FAX：022-233-8409
URL：http://www.tbgu.jp　E-mail：nyugaku@office.tbgu.ac.jp
981-8551 宮城県仙台市青葉区国見 6-45-1

学校法人 東北文化学園大学　広報誌 RENAISSANCE　発行日：2012.12　発行者：学校法人 東北文化学園大学　981-8550 宮城県仙台市青葉区国見 6-45-1　TEL 022-233-3330　http://www.tbgu.jp